

は じ め に

日本産科婦人科学会会長 矢 嶋 聰

記念すべき第50回日本産科婦人科学会総会ならびに学術講演会を、仙台市で開催するという光栄な機会を与えていただいたことに対して、改めて会員の皆様方に感謝いたします。ご存じのように、日本産科婦人科学会の母体ともいえるべき「日本婦人科学会」の創立は、今から96年前の明治35年です。しかし、これとても一朝にして成ったのではなく、その淵源はさらに10年も前であったとされています。大正4年には「近畿婦人科学会(昭和11年に産科婦人科医学会と改称)」が設立されました。以後、両学会は併存して活動を続け、昭和24年4月になってそれぞれが発展的に解消して「日本産科婦人科学会」を結成しました。その第1回総会(篠田 紘会長)が、敗戦後間もないこの仙台の地で行われたのです。それからちょうど50年という節目の年に、皆様方を再びこの地にお迎えできた不思議な‘えにし’と幸せとをしみじみ味わっております。

近年の産婦人科領域における研究分野の細分化・専門化の傾向は、進みこそしても衰える気配は感じられません。ご承知のように遺伝子あるいはDNAのレベルでの病態の解明が進行中です。しかし、私達は一方で、誕生から死に至る‘社会的ないのち’、就中‘誕生をとりまくいのち’の諸問題に深くかかわらざるを得ないのです。間もなく迎える21世紀には、分析的な手法での生命の理解と共に、‘社会の中での人間’、あるいは、‘地球・生物体系の中でのヒト’の観点からの「調和のとれた生存」が強く求められるようになるに違いありません。そんなことを思い浮かべながら、西澤潤一先生と多田富雄先生に第50回学術講演会の記念講演をお願いすることにしました。

‘国際交流’もまた、引き続いて新しい世紀のキーワードになる筈です。ちょうど今年は、第5回の日独シンポジウムが日本で開催される年に当たります。これを日本産科婦人科学会のインターナショナルワークショップ(IW)の枠で消化して貰うことにしました。このシンポジウムの慣例に従って、今回の発表はドイツ側からだけの演題になります。

さらに今年は、産婦人科認定医制度が発足してからほぼ10年になります。認定医制度委員会の企画による、Gerald B. Holzman先生(ACOGの教育ディレクター)の講演も予定しています。米国の卒後教育(研修)に関する内容ですから、研修指導医の先生方には参考にしていただける部分が多いのではないかと期待しています。総会・学術講演会が行われる頃を見計らって仙台の桜は満開になる筈です。‘春たけなわのみちのく’も同時にお楽しみいただけるものと思います。多数の先生方のご来仙を心からお待ちしております。